

天野雅敏著 『戦前日豪貿易史の研究——兼松商店と三井物産を中心にして——』

三輪 宗弘

目次は以下の通りである。

序論

第一章 一八八七—一八八八年の兼松房治郎の豪州視察

第二章 明治期の貿易商社兼松商店の経営と前田卯之助

第三章 明治後期の兼松商店の損益構造と経営

第四章 兼松翁記念事業について

第五章 戦前の日本の商社の豪州進出について

第六章 戦前における三井物産の豪州進出

結語

「序論」において、冒頭で「明治期以降の日本と豪州と

の直貿易をになった日本の貿易商社の豪州進出過程について明らかにしようとするものである」と狙いが明示され、「日本の商社の歴史研究」の先行研究が概説・紹介されている。引き続き兼松商店の先行研究や関連する社史や羊毛工業に関する文献、神戸大学に寄贈された兼松資料の研究進展状況が記される。

オーストラリアでの W.R. Purcell や P. Oliver の研究にも言及し、「戦前の在豪日系諸企業のやや概括的な研究に止まっており、研究の余地はなお残されている」と指摘する。天野は、神戸大学経済経営研究所に寄託された兼松資料とオーストラリア国立公文書館シドニー館の所蔵する接

収資料を紐解いて、「兼松商店と三井物産に焦点を絞り各々の豪州進出過程について追究」するとしている。

明治一〇年代の官営千住製絨所と大倉組、明治一〇年代二〇年代の民間製絨会社の設立動向や変遷を一瞥し、日本の羊毛工業を概説する。一八九〇（明治二三）年にシドニーに支店が設置され、五月に大阪毛糸紡績会社向けに羊毛が輸出されたことが記される。

天野は「日露戦後を中心に三井物産、大倉組、高島屋飯田が豪州に進出し、第一次大戦後の一九二〇年代初めに三菱商事、日本綿花、野沢などの進出がみられる」と日本の貿易商社の豪州への進出を簡明に紹介し、「本書では、さしあたり兼松商店と三井物産の豪州進出」を取り上げるとしている。引き続き各章のアウトラインが読者に示される。

「第一章 一八八七—一八八八年の兼松房治郎の豪州視察」では一八八七年一月から翌年五月にかけて七七回断続的に掲載された『大阪日報』の視察報告（第一次渡豪）に基づき筆をすすめている。「はじめに」「第一節 兼松房治郎のみたシドニーとメルボルン」「第二節 日豪貿易に関する兼松房治郎の考察」「第三節 兼松房治郎の「濠洲論」と提言」「おわりに」という節の構成で、多岐にわた

る兼松房治郎の幅の広い考察や矜持が紹介される。

この章は節によってテーマごとに分けられているが、兼松房治郎の視察報告の紹介のため、全体としてどのような観点から何を論じたのかが不鮮明で、纏まりが悪い。しかし、天野が取り上げた個々の記述には、掘り下げたら面白いと思う記述があつたので、この書評では第一節から拾っておこう。第二節、第三節も同様に興味深い洞察に満ちているが、割愛する。明治二〇年ごろの日本の商売慣行を知るうえで、オーストラリアとの比較から考察される日本論には興味深い考察がちりばめられている。評者は兼松房治郎の考察を興味深く読んだ。

「日本にて行ハる、糶市にハ往々見本と取引品と相違する事ありて約定後種々の面倒を生ずる事あれ共、当地の糶市などにハ斯かる如茲策を用ゐる商人なきを以て」とか「決して手代番頭又ハ支配人などに任し置く事なく、商家なれハ主人、会社なれば社長又ハ副頭取が自ら主となりて之を整理し」「我國にてハ兎角主人頭取などいへる人々ハ大風に構へ込み、重要な取引事にも手代支配人を用ひるの陋習あり」と商習慣の違いの比較を天野は取り上げている。当時の日本の取引の実情を知る上でも評者は面白いと

思った。

「西洋人の在留せる土地なれば、其商況報告、統計表、銀行総勘定考課状及び其地有名な諸製造所の勘定報告等を精密に調査編成したる事等なり」と指摘し、「該会議所の如きハ世上に対する義務として充分確実に之を調査し自ら報告の責に当る杯ハ実に感服するの外なきなり」との箇所が引用されている。資料や記録を重んじるイギリスの伝統をオーストラリアは継承していると思った。兼松房治郎の貯金の話、銀行の話も興味深い、略す。

評者の読後感から言えば、第一章はテーマの幅が広すぎて、後段の第四章とともにまとめて、補遺としたほうがよかった。天野の意図は兼松房治郎の人となり第一章で素描するにあつたのであろう。

第二章の狙いは「兼松商店の輸出入業務の動向をとりあげ、明治後期の経営動向と経営改革など」の検討であるとされる。第一節「明治後期の兼松商店の経営動向」では、明治後期の兼松商店の営業成績、輸入輸出動向、豪州輸入商品、豪州輸出商品、清国輸入商品、清国輸出商品が一覧表に示され、売上高、利益額、利益率の動向から「兼松商店の経営には看過しえない問題が顕在化していた」点が指

摘される。

第二節「兼松商店の経営改革と前田卯之助」では兼松商店が投機の失敗から改革そしてコミッションビジネスモデルの構築「安全ニシテ確實ナル約定ニ基ク売買」による企業成長という視角からストーリーが展開される。投機と中国貿易からの撤退そしてオーストラリアとの羊毛貿易は関係しており、本章は兼松商店発展の基本理念を示している。蚕糸貿易に関する『兼松商店史料 第一巻』（明治二十九年、一三八、一三九頁）が紹介され、「三十二年ニハ巨利ヲ挙ゲタルモ翌年ニハ之レニ倍蕪セル大欠損ヲ招キ、商店浮沈ノ問題」が丁寧に時系列で追われている。原幸治郎の積極主義が「大失敗」を来たし、兼松商店を「窮地ニ陥レ」たのであつた。「奇利ニ酔ヒタル当局ハ其勢ニ乗ジテ本年ニ入リテモ猶強氣一点張りニテ……損失ニ躊躇シテ見切り兼居ル内、不計モ北清事変ノ突発スルアリ……巨額ノ損失ヲ来シタリシガ、当年後半、新季節ニ入ルニ及ビ我当局ハ一変弱気方針ヲ以テ出動シ、以テ上半季ノ失敗ヲ恢復セント焦慮セシニ、期初僅カニ策戦ノ的の中ヲ喜ビ居ルノ邊モ無く、一般市況忽チ逆転ノ結果……下半季戦モ亦所謂損失ノ上塗りニ終リ……恰カモ廿九年六月、蚕糸取扱開始以来、前年

ニ至ル四ヶ年間ノ利益累計額ニ倍スルノ慘況ヲ呈シ」(『兼松商店史料 第一卷』、明治三十三年、二八四、二八五頁)たのであった。兼松商店の病根を射抜いた前田卯之助は「ヒソカニオモエラク、商店ノ病根ハ無主義、無方針ニアルナキカ、方針ナキニアラザルベシ、終始一貫ノ大方針ナキノ謂ナリ」と抉り、「濠洲商品ノ大宗タル羊毛ノ受託買次ト牛莊貿易ノ骨子タル豆粕ノ見越売買トヲ兼営スルガ如キ不権極マル事実モ無主義ヨリ来レル一現象ニ非ルカト」鮮やかに問題点を指摘していることが本章で二度引用され、紹介されている。大局からの「大方針」がなく、「無主義」の組織は、いつの時代でも淘汰されていくのであろう。筆者は今日の日本の大学を暗示しているようでもあり、大企業病を鋭く抉っているような気がした。

前田が「正面ヨリ豆粕取引ノ全廢」を提案したのは、『兼松商店史料 第二卷』(明治三十六年、三三三、三四頁)によれば、「豆粕并ニ大豆ノ先物産地買附為替先約地場売約ヲ同時ニ行フモノトスレバ常ニ一%前後ノ損失計算トナリテ殆ンド例外ヲ見ズ、之レ全ク為替上ニ便宜ヲ有スル清商ニ比シ、吾人ノ對抗条件ノ不利ナルニ因スベシ、其結果吾等ハ銀相場又ハ内外豆粕相場ノ将来ノ騰落ヲ賭スルノ外到底

此取引ニヨリテ利ヲ得ルノ道ナク、安全ニシテ確實ナル約定ニ基ク売買ノ余地皆無ナリ、商店ハ宜シク断然此商買ヲ廢スベシ」ということであつた。上のような前田の鋭い洞察は、天野の関連箇所的確な引用をじっくり手にとって堪能されたい。史料のどの箇所を引用するのか、引用した資料を活かしながらどのように論を組み立てるのか、経済史家の力量が問われるところである。

蚕糸貿易や豆粕取引の対清貿易は投機性が強く、事業の健全性と合理化が兼松商店の課題であつたことが描かれている。評者の思い出話を挿入させていただきたい。

小生の父は丸紅や伊藤忠と取引があつたが、小生が商社のリスクヘッジ云々と受け売りで鼻高々に父親に話したところ、即座に「何がリスクヘッジなものか。手張りで大損したのが何人もいる。」と怒られた。

第三章は三つの時期区分に分け、明治後期の経営動向と経営革命について考察を加え、損益構造の分析を展開する。この時期区分は前章で描かれた「投機の失敗そして改革、企業としての成長」が念頭に置かれ記述されている。

第一節「兼松商店の損益構造…一八九五—一八九九年」では、兼松商店の収益諸科目と損失および費用諸科目の動

向を整理したものが表3-1に示されている。コンパクトにまとめられた表で兼松商店が何を扱い、何で利益を得ていたのかがよくわかる。輸入羊毛からの利益が利益全体の一〇%から二五%を占め、牛骨が三から八%、牛筋牛蹄帶皮牛脂が約一〇%である。評者が面白いと思った点は八九七(明治三〇)年に肥料利益が一五・七%をいきなり計上し、翌年は三二・四%、一八九九年は一二・八%を占めている点である。高橋周論文「新興肥料商の成長と貿易商―鈴木鹿保家商店と兼松房次郎商店―」(文京学院大学『経営論集』、第一九卷第一号、二〇〇九年)を参照すれば、兼松商店のオーストラリアからの牛骨などの動物質肥料の輸入を関東で肥料商を営む鈴木鹿保家商店との関係からさらに掘り下げることができたであろう。神戸大学経済経営研究所が平成一八年と一九年に刊行した『兼松商店史料 第一卷』『兼松商店史料 第二卷』にも関連する資料が残されているだけに、正直残念であった。

前章でリスク管理の問題が指摘された蚕糸部利益は一八九六(明治二九)年に一・二%、以下四・六、七・七と来て、一八九九年に三五・五%と大幅に伸張している。「受托式ニ始マリシモ後ニハ先物見越シ売買本位」になり、同

年には輸入羊毛の利益の二・六倍を計上したことが指摘され、「巨利ヲ拳ゲタルモ翌年ニハ之レニ倍蓰セル大欠損」を招いたように問題が潜んでいたのであった。この時期の羊毛取引は「官業ノ注文ハ一二籠商ノ独占」状態で「多年大倉組ノ独占ニ属シ」、兼松商店の千住製絨所への参入に関しては「十年ノ奔走殆ンド寸効無」かった。天野は一八九九年の兼松商店の取引先別の羊毛注文数を表3-2に掲げているが、全体が把握でき、参考になる。取引状況が表のデータと文章の資料の双方によって丁寧に説明されている。

第二節「兼松商店の損益構造…一九〇〇―一九〇三年」では、投機の失敗による「大損失」が表3-3に鮮やかに示され、兼松商店が横浜正金銀行の救済にすぎり、かつ「当年度ノ決算面ハ対銀行ノ体面取繕ヒ上種々糊塗修飾ノ苦策」に出なければならなかった。表3-3では蚕糸部の損金を他部門の科目に振り分け、糊塗したことが読み取れる。この大損失が兼松の経営改革につながるのである。一九〇一年に蚕糸部と上海支店が廃止され、一九〇四年に牛莊出張所が閉鎖されたが、「権限ヲ越エテ為替及商店等ノ投機ニ」手を染めていたのであった。

第三節「兼松商店の損益構造…一九〇四—一九〇八年」では、兼松商店が千住製絨所と陸軍被服廠の羊毛受注に成功したことが、『兼松商店史料 第二卷』（明治三八年、一二二頁、一五六頁）から引用され跡付けられている。

「千住製絨所所用羊毛注文引受」に参入できた経緯が詳細に描かれている。「軍閥所長去リテ篤学真摯ノ人格者大竹工学博士」が着任し、「果斷ニシテ事理ニ通ゼル頭脳明敏ノ士、阪口事務官」が新たに入り補佐するという機会をとらえたことが描かれる。これまでの東京製絨会社などの民間諸工場への納入実績の「詳細ナル統計」を付けた「委託下命願ヲ差出」し、大竹所長の豪州出張にあわせて店祖も渡豪し、「市場ノ実況并ニ商店ノ実力、北村等ノ技倆等ヲ親シク査察ノ上、十月ニ至リ Soured 羊毛三十五万ポンド買次方ノ委託注文ハ遂ニシドニーニ於テ同所長ヨリ我支店ニ発セラレ、挙店十五年来ノ素願茲ニ初メテ達セラレ」たのであった。同じく翌年一九〇六年の陸軍被服廠の羊毛受注の過程も描かれており、矢野陸軍被服廠長が渡部千住製絨所技師を帯同して渡豪した機会をとらえ「廠長ノ一行ハシドニー着ノ上具サニ市場并ニ内外 Buyers ノ実情ヲ察シ、我ガ北村ノ練熟セル技倆并ニ当務ノ誠意ヲ認メタ

ル結果、購入量ノ大部分ヲ挙ゲテ尅万余俵ノ買次ギヲ数次ニ我ガシドニー支店ニ下命スルニ至」ったとしている。兼松商店が官需の獲得に成功した影響は表3-5「日露戦後の兼松商店の取引先別羊毛取扱数量」から拾うと、陸軍被服廠が五〇%から三〇%、千住製絨所が一〇%から三〇%も占めていることにも見てとれる。同表から羊毛需要量の急増も読み取れ、他の貿易商社の豪州進出を後押ししたのであった。この点が第五章と第六章で取り上げられる。

天野は淡々と引用し、表のデータで取り扱い数量の変化を明快に読者に示す。シエパードが羊の群れを巧みに誘導するかのよう資料を走らせ、止まらせ、左に右に操りながら、兼松商店の経営変革を三つの時期区分に区切り、鮮明なストーリーを描く。膨大な量の史資料の中から変化を嗅ぎ分けて、兼松商店がビジネスチャンスをつかみながら、成長している様を描いている。天野の資料を嗅ぎ分ける能力は長年の資料との格闘によって養成され、裏打ちされている。評者には読み応えがあった。

第四章はこれまでの流れから一息入れ、創業者兼松房治郎の公益に対する関心と、その意思を継承した三つの記念事業がどのような経緯で実現したのかを記述している。

本章の「はじめに」で兼松房治郎の経営哲学である、事業が一個人の「所有物でも親族の独占物」でもなく、「創業者没後も店員などで永久に継続されるべきもの」が指摘され、このような精神が、「匿名組合、合資会社、株式会社へと変遷をとげる過程で、特有の従業員持株制度として具現」したのであった。

### 第一節 神戸高等商業学校兼松記念館

### 第二節 東京商科大学兼松記念講堂

### 第三節 シドニー病院兼松記念病理学研究所

関心のある読者はこの章を眺められたいが、商社の取引に関心のある方には本筋から外れた回り道であろう。前述したが、評者ならこの章は第一章とともに最後に補遺という形で配置したであろう。そうすることで第三章と第五章がスムーズにつながるからである。天野は「兼松房治郎」「兼松商店」という括りで、第一章と第四章をここに配置したのであるが、商社のオーストラリアでの営業活動というストーリーからは脇道である。

次に第五章をみよう。本章は第二章と第三章を踏まえ、

日本商社の豪州への進出が扱われる。表5-1にオーストラリアからイギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、アメリカ、イタリア、日本への羊毛輸出一覧表が掲げられ、一九〇一年から一九三九年までの輸出動向が概観できる。日露戦争期に増加するものの、一九二〇年代の日本の占めるシェアは一〇%から一五%にまで拡大し、イギリス、フランスにつぐ輸出国になっていた。一九三〇年代に日本はイギリスに次いで第二位の豪州羊毛の輸出先になっていた。図5-1で日本商社の豪州進出がP. O'Brienの研究に準拠して、さらに取捨選択されわかりやすくまとめられ、時間とともに変動する商社の買付量やシェアの変遷が丁寧に示される。天野の各章の図表は情報がコンパクトに詰め込まれ、一枚一枚が周到に準備され提示される。どの表もよく吟味され内容が落としこまれている。若い研究者は、さりげない天野の表作りの巧みな技を盗み取るべきだと評者は思った。

大倉組、三井物産、三菱商事などのオーストラリア進出が一次資料を引用する形で紹介される。三菱に関しては食料品の小麦、小麦粉の取引にも踏みこめるのではないかと読みながら感じた。天野は手を広げずに禁欲的に「羊毛」

という視角を常に意識しているが、資源や食糧という商品に關しては紙幅が割り当てられていない。次の論文で取り組まれるのであろう。

商社のオーストラリアへの進出を日本人駐在員の分析から描こうとしている。表5-4から表5-6にシドニー、メルボルン、ブリスベンの一九三六年の日本人駐在員数が示され、また三井物産、兼松商店、三菱商事が人数でも多かったことが読みとれ、三菱商事の急成長が裏付けられている。

第六章は三井物産の豪州進出過程を扱っている。三井物産が兼松商店に追いつき、追い越していく過程が描かれる。三井物産が伸張できた背景には金融力の果たした役割が大きかった。天野は三井物産の一九一八（大正七年）の『支店長会議議事録』から「兼松ノ金融力ノ足サルコトモ知レルヲ以テ、三井ニ便リ来ルニ至リシコトモノノ商売増加ノ原因ニ非スヤト考フ」とあるように、三井物産の持つ金融融資力が羊毛取引に有利に作用したことが描かれる。天野は三井物産の考課状を援用しながら、三井物産が第一次世界大戦時のイギリスの禁輸に際して南アフリカの羊毛取引で両国間の貿易を伸ばした事実については一九二一年下半期の考課状「兼松商店ハ其取扱ノ歴史最モ古ク当社ノ一大

勁敵タルヲ失ハザルモ、当社ハ戦時中ヨリ南阿ニ於テ獲得セシ勢力ヲ以テ之ニ対抗大ニ努力スル所アリ、為メニ近時ハ同店ト常ニ伯仲ノ間ニアリ」に基づき、第一次世界大戦の禁輸に乗じて、南アフリカから羊毛を輸入し、三井物産は日本国内での存在感を高めたことが示唆される。この点は面白い事実であるが、天野はこの美味しい獲物は簡単に紹介するに止め、追わない。小生ならこの点を他の文献で網羅的に調べ、ストーリーを展開するだろう。業界紙に当たり、南アフリカからの羊毛輸入がどのように論じられていたのか、掘り下げてほしかった。三井物産の『支店長会議議事録』ではどのように書かれていたのであろうかも気になったが、触れられていない。三井物産が兼松商店の力及ばぬ南アフリカの羊毛輸入によって、トップランナーとの距離を詰め、ついに兼松と並走するにいたるまで飛躍した経緯に關して、第一人者の天野には、南アフリカの羊毛取引には兵力を集中して攻め、個々の企業と取引関係をどのように構築していったのか、探究してほしかった。

天野は一九二四年上半期の考課状を紹介しながら「震災ノ直接間接損失ニヨリ独力金融ヲ計リテ注文スル能力ナク、勢ヒ当社ノ如キ大商店ニ依頼シ来レリ」と述べ、金融面か

ら毛織物会社に「出来ル限り援助」をした結果として「関東側注文ハ兼松以下他商ノ買付数殆ト算スルニ足ラザリシハ又怪ムニ足ラズ」としている。同年下半期の「考課状」の引用では興味深い資料を掲げる。

「当地金融難ハ本期ニ入りテ一層甚シク、為ニ買付技術ノ巧拙以外ニ、買付金融力ノ如何及為替裁定ノ巧拙ガ注文ノ有無大小ヲ決スル最大原因トナレリ、当店ハ、従来通り倫敦廻シノ為替方法ニヨリ、単ニ注文ヲ受ケシ数量ヲ買付ケタルノミナラズ為替裁定方法ニ於テモ他社ノ追隨ヲ許サズル当社ノ金融力」によってシドニー市場で「世界各国買付商ニ伍シ第二位トナルニ至レリ」と書き、兼松に関して「従来正金銀行ニノミ依頼シ、為替ハ日本宛ニ局限セラレ居タルガ、最近当地外国銀行ニヨリ倫敦廻シ為替ヲ利用セント努メツ、アルモ、少額ニシテ充分ニ買付ラレズ」  
「三菱同社金融力ヲ利用シ、一氣ニ兼松ヲ凌駕セント計画セシモ Credit 意ノ如クナラズ、又買付技術ニ未熟ナル為メ買付モ少ク」  
「大倉、飯田両社ハ前期当地正金銀行ノ金融ニノミヨリテ、注文数ノ激減セシヲ恐れ、本期ハ倫敦廻シヲ手配シタルモ其額云フニ足ラズ」とあり、三井物産が金融力でロンドン廻しや為替裁定方式のノウハウを駆使す

ることで買付を有利に展開していることが描かれる。

天野は考課状を駆使しながら、三井物産が伸張した背景に「他社の追隨を許さない金融力の存在」（二三七頁）を指摘する。引用資料も的確で、ストーリーがわかりやすい。

大島久幸による本書の「書評」〔『経営史学』第四八巻二号、二〇一三年九月号〕の中で、高村直助「シドニー支店の羊毛貿易金融」（山口和雄・加藤俊彦『両大戦間の横浜正金銀行』日本経営史研究所、一九八八年）に言及しているが、高村論文を取り上げ、三井物産の金融面に対する有利さに対して、兼松商店や他の商社はどのように対抗したのか、また金融面の相対的な弱さをどのように克服せんとしたのか、筆を走らせてほしかった。一五一頁の注一四の井島重保「羊毛の研究と本邦羊毛工業」の記述しかない。あわせて三菱商事の金融力にも紙幅を割いてほしかった。金融力がオーストラリアからの羊毛輸入に於いてどのような形で有利に作用したのだろうか。

第六章の五枚の表であるが、前章までの表と同じく、洗練されている。商社各社および毛織物業者の動向が一目瞭然である。兼松商店、高島屋飯田、大倉、岩井商店、日本綿花の羊毛買付けは関西方面の毛織物会社によるものが多

く、三井物産や三菱商事の場合は、日本毛織などの関西方面の毛織物会社とあわせて関東方面の東京モスリン紡織などにも取引を伸ばすことで、羊毛買付けの増大につながることが示されている。関西と関東の毛織物業者が商社をどのような観点から使い分けていたのかについての言及があれば、内容が膨らんだであろう。商社サイドだけでなく毛織物業者の業界紙にも目配りして、買付け側からみた商社の比較があれば、画竜点睛であった。

兼松商店中興の祖である前田卯之助の教えに従い、天野雅敏はオーストラリア、羊毛、兼松などのオーストラリア国立公文書館所蔵の一次資料という投機性のない確実な資料で巧みに筆を操っており、これが本書の手堅い、また安心しながら読める点である。一方で投機の見込商売で大損害をもたらした原幸治郎のように、南アフリカの羊毛、オーストラリアの小麦などの食料、先行研究である二次文献をも果敢に取り込み、投機性のある記述もほしいと感じた。「商店ノ病根ハ無主義無方針」と喝破した前田卯之助は大先輩に対して遠慮なく意見「其危険ハ実二大ナリト」を述べたとあるので、小生も前田卯之助にならい大先輩天野雅敏に直言して結びとしたい。大阪経済大学日本経済史研究

所が発刊する『経済史研究』に左のテーマを盛り込んだ「投機」に満ちた大胆かつ危険な論考をお願いし、筆を揃くことにする。

- 一、オーストラリアと日本の肥料・食料貿易
- 二、第一次大戦期の南アフリカ羊毛貿易と三井物産の躍進
- 三、三井物産の金融力に対して兼松商店などの本邦商社が羊毛貿易でどのように対抗したのか。
- 四、戦後の伊藤忠や丸紅の羊毛取引と石炭や銅山などの資源貿易
- 五、毛織物会社から眺めた、商社の利用と活用方法。

〔付記〕 引用に際して『兼松商店史料 第I巻』（神戸大学経済経営研究所編著並びに発行、二〇〇六年）、『兼松商店史料 第II巻』（天野雅敏・井川一宏編、神戸大学経済経営研究所発行、二〇〇七年）を参照した。

天野雅敏著『戦前日豪貿易史の研究―兼松商店と三井物産を中心にして―』（勁草書房、二〇一〇年四月刊、A5判、ii＋一六六頁、本体価格三、二〇〇円）

（みわ むねひろ・九州大学記録資料館産業経済資料部門教授）